

松原市・大阪市

大和川今池遺跡・天美西遺跡

—都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター

松原市・大阪市

大和川今池遺跡・天美西遺跡

—都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

大阪府のほぼ中央に位置する松原市は、難波宮の朱雀大路から直線的に南下する「難波大道」や、大阪平野を東西に結ぶ大津道（長尾街道）、丹比道（竹内街道）など、古来より多くの官道が走る交通の要衝です。これらの古道は『記紀』などの文献に記載されており、その敷設時期や位置などについて、早くから研究が進められてきました。加えて近年では、発掘調査の成果を礎として考古学の面からも検討が行われております。平成20年度に当センターが実施した大和川今池遺跡の発掘調査において、「難波大道」の延長部が発見され、大きな注目を集めたことは記憶に新しいところです。

本書に収録しております大和川今池遺跡と天美西遺跡が接する地もまた、古道として知られる下高野街道にあたります。今回の調査地周辺では、下高野街道は、平安時代初頭の建立と伝えられる阿麻弥許曾神社の参道としての機能も有しております。当センターが平成18・19年度に実施した発掘調査では古道の側溝と思しき溝が検出されており、古代における交通網の一端を垣間見ることができました。往時に想いを馳せますと、往還する人々の姿が目に浮かびます。

今回の調査は小規模なものであり、古道の姿を明らかにしうるものではありませんでした。しかしながら、弥生時代以降連續と続く人々の営みを窺い知ることができ、また新たな成果を加えることができました。こうした調査成果を積み重ね、過去の姿を現代に伝え、残すことができますのも、関係各位、皆様のご協力、ご配慮があってこそと考えております。深く感謝申し上げるとともに、今後も当センターの事業に変わらぬご理解とご協力をお願いいたします。

平成23年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府松原市天美西3丁目地内に所在する大和川今池遺跡、および大阪市東住吉区矢田7丁目地内に所在する天美西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市計画道路大和川線外建設における送水管布設工事に伴い、大阪府富田林土木事務所から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。発掘調査および整理作業にかかる受託契約と契約期間は以下のとおりである。

受託事業契約名　都市計画道路　大和川線外　大和川今池遺跡（その5）発掘調査委託

受託契約期間　平成23年5月2日～平成23年11月30日

現地調査は平成23年5月12日に開始し、7月29日に終了した。整理作業は平成23年8月1日から8月31日まで行い、11月30日に本書の刊行をもって完了した。

3. 発掘調査および整理作業における調査体制は以下のとおりである。なお、現地調査および整理作業にあたっては、随時、当財団職員の助言を得た。

調査課長　江浦　洋、調整グループ長　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀

南部総括主査　西村　歩、技師　永野　仁

4. 調査にあたっては、以下の諸機関よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

（敬称略・順不同）

大阪府富田林土木事務所、大阪市教育委員会、松原市教育委員会、大阪府教育委員会

5. 本書で用いた現地写真は永野が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては調査グループ南部調査事務所　非常勤職員　久禮孝志が担当した。

6. 本書の執筆・編集は永野が担当した。

7. 本調査に関わる遺物・写真・図面などの記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1. 標高についてはすべて東京湾平均海面（T.P.）+値を使用し、m単位で表している。
2. 本書に掲載した遺構分布図・遺構図・その他すべての図の座標は、世界測地系（測地成果2000）によって測量し、国土座標法による平面直角座標第VI系で示している。表記はすべてm単位である。
3. 本書で用いた北は座標北を示す。なお、遺跡周辺の磁北はN 6° 27' Wに、真北はN 0° 13' Eに偏位する。
4. 発掘調査および整理作業は、公益財団法人大阪府文化財センター2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行った。
5. 地層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2009年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、種類に関係なく、調査において検出した順に通し番号を付し、番号の後に遺構種類を表記した。
7. 遺構分布図の縮尺は100分の1、個別遺構の平面・断面図は40分の1を基本とし、異なる縮尺を用いる場合には、各図のスケールに明記した。また、遺物の縮尺は4分の1とした。
なお、遺構の規模を記す場合はm単位で記し、小数点第2位を最小値とした。また、遺物の記載にあたってはcm単位で、小数点第1位までの表記とした。
8. 本書における遺物についての記述は、掲載遺物に限らず、出土した遺物すべてを対象としたものである。
9. 参考文献は、以下の11に記す文献を除き、第5章末にまとめた。
10. 図版の縮尺は統一していない。
11. 出土遺物の記述においては、以下の文献を参考にした。

寺沢 薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

古代の土器研究会編1992『古代の土器1 都城の土器集成Ⅰ』古代の土器研究会

古代の土器研究会編1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会

古代の土器研究会編1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会

中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

目 次

序 例	文 言
凡 目	例 次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法	
第1節 発掘調査の方法	7
第2節 整理作業の方法	7
第4章 調査の成果	
第1節 既往の調査成果	9
第2節 層序	9
第3節 遺構と遺物	11
第5章 総括	18
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

図1 遺跡位置	1	図2 遺跡周辺の地形	3
図3 周辺遺跡分布	5	図4 地区割と調査地の位置	8
図5 既往の調査との位置関係	9	図6 調査区地層断面	10
図7 第1面平面	11	図8 第1面検出遺構平・断面	12
図9 第2面平面	13	図10 第2面検出遺構平・断面	14
図11 第3面平面	15	図12 第3面検出遺構平・断面	16
図13 包含層・攪乱土出土遺物	17	図14 遺構変遷図(1)	18
図15 遺構変遷図(2)	19		

写 真 図 版 目 次

図版1 遺構(1)

1. 1トレンチ 基本層序(南西から)
3. 1トレンチ 第1面 全景(南から)
5. 第1面 2溝 断面(南東から)
7. 第2面 4土坑 断面(南東から)
2. 1トレンチ 基本層序(南から)
4. 第1面 1土坑 断面(南東から)
6. 1トレンチ 第2面 全景(東から)
8. 第2面 5ピット 断面(南東から)

図版2 遺構(2)

1. 2トレンチ 全景(西から)
3. 第3面 6溝 断面(南から)
2. 1トレンチ 第3面 全景(南から)
4. 第3面 19ピット 断面(西から)

図版3 遺物

1. 大和川今池遺跡 1層出土 土器
3. 大和川今池遺跡 攪乱土出土 土器
5. 天美西遺跡 攪乱土出土 土器
2. 大和川今池遺跡 2層出土 土器
4. 大和川今池遺跡 攪乱土出土 墓輪

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書において報告する事業は、都市計画道路大和川線外建設事業における、送水管の布設工事に伴う大和川今池遺跡・天美西遺跡発掘調査である。

都市計画道路大和川線は、大阪圏における環状道路の整備（大阪都市再生環状道路）として、大阪府都市整備部により建設が進められている道路である。「大阪都市再生環状道路」は、既存の路線である近畿自動車道・阪神高速大阪湾岸線と、新規路線である大和川線・淀川左岸線、および構想段階の淀川左岸線延伸部で構成される。大和川線はこの環状道路の一環として、阪神高速三宅ジャンクションから三宝ジャンクション間のおよそ 9.9km を結ぶ路線である。

公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センターと略記）では上記事業に伴い、三宅西遺跡・池内遺跡・大和川今池遺跡の発掘調査を平成 16 年度より順次実施している。大和川今池遺跡における調査は平成 18 年度より計 4 次実施しており、調査成果は『大和川今池遺跡 I』～『大和川今池遺跡 IV』として逐次報告している。

本調査は、工事の実施に先立ち、埋蔵文化財の情報を取得することを目的とし、大阪府都市整備部富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、当センターが実施したものである。

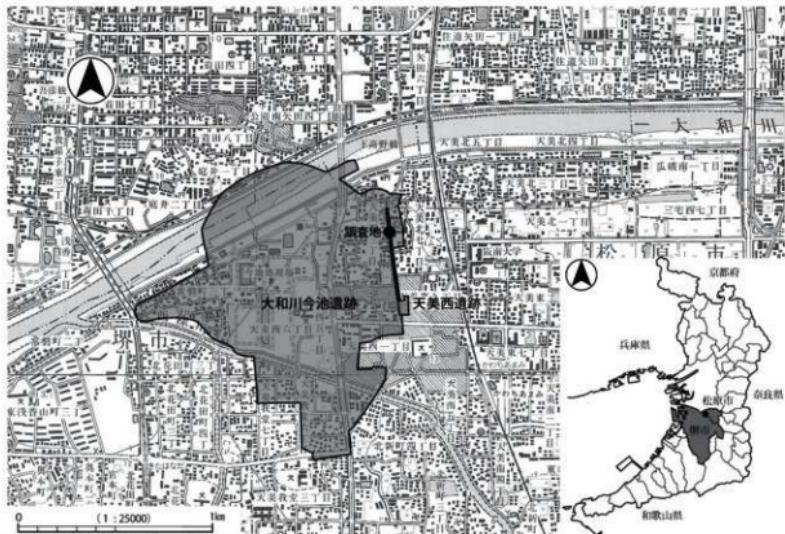


図1 遺跡位置

第2節 調査の経過

本事業は、松原市天美西を中心に所在する大和川今池遺跡と、大阪市矢田に所在する天美西遺跡の、隣接する2遺跡の調査である。調査地は、府道26号線（大阪狭山線）上にあたり、同線の中心線から東へ約5mの範囲が大阪市域に、それ以外が松原市域となる。今回の調査における遺跡範囲の認定についても、これに従った。

現在、府道26号線は生活道路として供用されており、調査に伴い道路を封鎖した場合、周辺住民の生活に支障をきたすことが予測された。こうした事態を回避するため、迂回路を設置する必要が生じ、その用地を確保する目的から、調査区を東西2トレンチに区分し、東側を1トレンチ、西側を2トレンチと設定した（図4・5参照）。

調査に先立ち、調査区内に含まれる汚染土壌の改良工、その過程で存在が明らかとなった地下構造物の撤去工、府道26号線の地下に布設された水道およびガス埋設管の保護工などの仮設工を実施した。

こうした一連の仮設工を終えたのち、ただちに発掘調査を開始した。調査は、既往の調査成果を参考に、現代の盛土および擾乱土を重機により掘削し、それ以下を、地層の堆積単位毎に、人力によって掘り下げる方法で行った。なお、調査方法の詳細については、第3章に記した。調査面積は、最終遺構面において、64.8m²を測る。調査期間（機械掘削開始～人力掘削出来形測量）は、1トレンチが平成23年6月8日から6月24日まで、2トレンチが平成23年7月13日から7月29日までである。

以上の調査における遺物の出土量は、大和川今池遺跡・天美西遺跡合わせて、コンテナに換算して2箱である。

現地における発掘調査終了後、南部調査事務所において、報告書作成に向けた整理作業を行った。整理作業に要した期間は、平成23年8月1日から8月31日までである。最終的に、同年11月に『大和川今池遺跡・天美西遺跡』として本報告書を刊行したことをもって、全ての業務を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大和川今池遺跡は、大阪府松原市天美西および堺市常磐町を中心に南北約1km、東西約1.45kmの範囲に広がる、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。昭和52(1977)年、大阪府下水道部により「大和川下流西部流域下水道今池処理場」建設が計画されたことを契機として遺跡が発見された。以来、大阪府・堺市・松原市の各教育委員会により組織された大和川・今池遺跡調査会をはじめ、大阪府教育委員会・松原市教育委員会および当センターによって、40次におよぶ発掘調査が実施されている。それらの調査の結果、旧石器時代から近世に至る、多数の遺構・遺物が確認され、府内における著名な遺跡のひとつに数えられている。

天美西遺跡は、大和川今池遺跡の北東部、大阪市東住吉区矢田に所在する。同地は、遺跡の北にある阿麻弥許曾神社の参道部にあたり、松原市域に突出するような形で大阪市域が区画されている。平成18(2006)年に財団法人大阪市文化財協会(現・財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)により実施された発掘調査において、平安時代末頃の集落跡が確認されている。

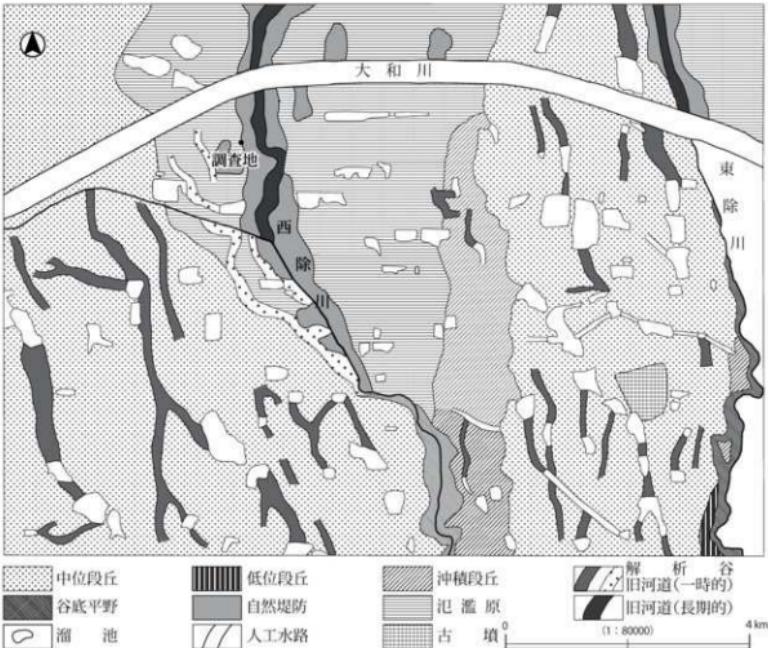


図2 遺跡周辺の地形

現在、大和川今池・天美西両遺跡の北には、奈良県に源流を持つ大和川が東西に流れている。また、南には、大阪狭山市に所在する狭山池を源とする西除川が北西に流れている。両河川は、堺市常磐町で合し、大阪湾へと注いでおり、両遺跡はふたつの河川の合流点に程近い地に立地している。しかしながら、こうした景観は宝永元（1704）年に行われた大和川付替以後に形成された、比較的新しいものである。大和川付替以前の西除川（旧西除川）は、大和川今池・天美西両遺跡の東方を北流し、現在の大阪市生野区舍利寺・巽付近において、同じく狭山池を源とする東除川と合流し、さらに北へ流れられたのち、旧大和川へと流れ込んでいた。

大和川今池・天美西両遺跡が広がる地は、その形成過程において旧西除川による影響を強く受けたものと考えられている。日下雅義氏の分類によると、遺跡が所在する地は、和泉山脈から派生した中位段丘から旧西除川の氾濫原を経て、自然堤防へと推移する地形を呈する（日下 1980、図2）。今回の調査地は、大和川今池遺跡の北東端部に位置しており、氾濫原から自然堤防へと移行する境界にあたる。

第2節 歴史的環境

大和川今池遺跡および天美西遺跡が立地する河内平野南部では、旧石器時代から近世にかけて各時代の遺跡が所在している。近年の発掘調査による歴史資料の増加に伴い、具体的な様相が明らかになりつつある。

旧石器時代 大和川今池遺跡では、既往の調査において当該期の遺構は確認されてはいないが、翼状剥片石核や国府型ナイフなどの石器が出土している。

近隣では、堺市南花田遺跡において竪穴遺構が確認されるとともに、層位的に3層に分層可能な包含層から豊富な石器が出土している。また、大阪市遠里小野遺跡や瓜破遺跡・長原遺跡でも当該期の石器が出土している。瓜破遺跡では、西地区でサヌカイトのチップが確認されており、後期旧石器時代の石器製作に関わるものと考えられている。

縄文時代 大和川今池遺跡では、包含層から石錐や有舌尖頭器・石匙などの石器が出土しているが、明確な遺構は確認されていない。

周辺の主たる遺跡には、大阪市山之内遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡、松原市三宅西遺跡などがある。長原遺跡は、近畿地方における縄文時代晚期終末期の指標となる長原式土器の標識遺跡として、全国的に著名な遺跡である。三宅西遺跡では、縄文時代後期中葉の土器が良好な状態で出土している。

弥生時代 大和川今池遺跡では、遺跡範囲の北東部において、前期・後期の遺構・遺物が確認されているが、その数は決して多くはない。平成18・19年度に当センターが実施した「大和川今池遺跡06-1」調査（以下、「06-1調査」と略記）においても、弥生時代後期後半から庄内式期にかけての遺構・遺物が確認されているが、集落の縁辺部である可能性が高い。

周辺では、松原市池内遺跡・三宅西遺跡、大阪市瓜破遺跡・山之内遺跡・長原遺跡・南住吉遺跡、堺市北花田遺跡など多数の遺跡がある。池内遺跡では、弥生時代前期の水田と集落、および弥生時代後期から庄内式期にかけての方形周溝墓が確認されている。三宅西遺跡では、弥生時代中期に帰属する30棟以上の竪穴建物が検出されている。瓜破遺跡では、弥生時代中期の集落と墓域が確認されている。同遺跡は、中国新代に鋳造された貨幣「貨泉」が採集されたことでも有名である。

古墳時代 大和川今池遺跡では、前期および後期を中心に竪穴建物や掘立柱建物・井戸・土坑・溝など

の遺構が確認されるとともに、遺物もまとめて出土しており、人間活動が活発化することが明らかとなっている。また、06-1調査では中期の埋没古墳が1基検出されており、周溝から円筒埴輪や家形埴輪が出土している。これ以外にも、遺跡内には円墳と推測される孤塚古墳跡があり、周溝が確認されている。

大和川今池遺跡周辺においても、古墳時代になると人間活動が活発化するとみえ、遺跡数は格段に増加する。主な遺跡だけでも、大阪市瓜破北遺跡・長原古墳群・加美古墳群・堺市田出井山古墳（伝反正陵）・天王古墳・鈴山古墳・松原市新堂遺跡・三宅遺跡・池内遺跡・大塚山古墳など、枚挙にいとまがない。また、『記紀』に記載される「依羅池」の造営および「依網屯倉」の設置は、古墳時代中期に遡る可能性が指摘されている。その真偽は更なる検証が必要であり、安易には断じかねるが、国家が主体となる開発が行われた可能性がある。

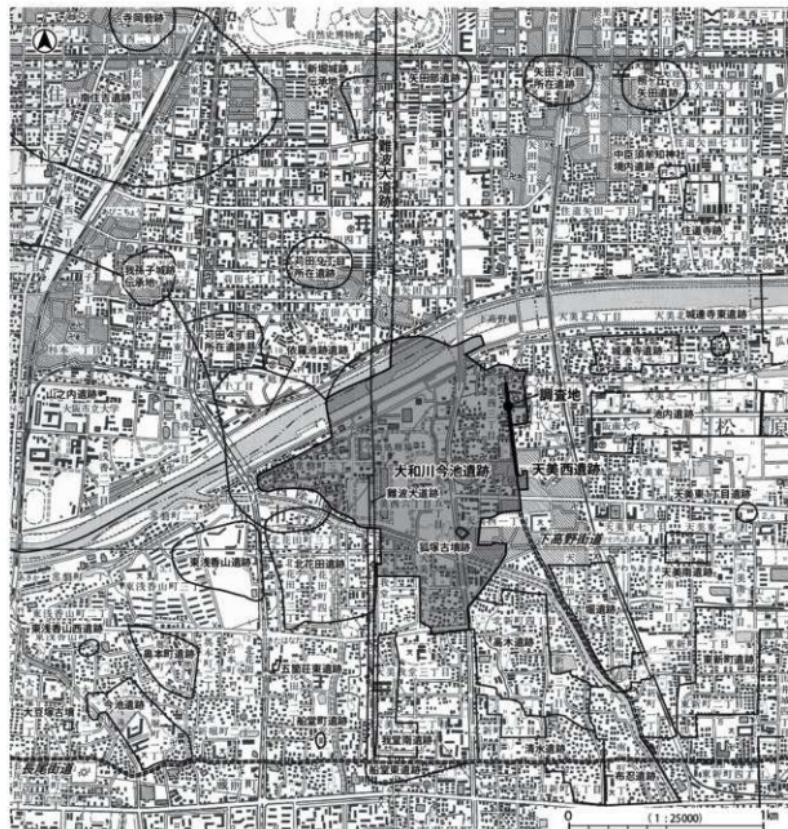


図3 周辺遺跡分布

古代 大和川今池遺跡における古代の重要な成果として、「難波大道」の存在が挙げられる。「難波大道」は、大阪市中央区法円坂一带に営まれた難波宮の朱雀大路から直線で南下し、大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）と連絡する官道である。『日本書紀』推古天皇廿一年十一月条に「又難波ヨリ京ニ至ルマデニ大道ヲ置ク」とみえる。昭和15（1930）年の調査において、難波宮の中軸線の延長上に、幅約18mの間隔を有しながら平行する2条の溝が検出された。この2条の溝の中軸線と難波宮の中軸線が一致することから、上記の「大道」に当たると考えられ、「難波大道」と命名された。その後、平成20（2008）年に当センターが実施した調査では、「難波大道」と思われる道路状の遺構を、南北46mにわたって検出している。

「難波大道」以外にも、大和川今池遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物や井戸・土坑、奈良時代の水田などが検出されている。大和川今池遺跡から三宅遺跡にかけては、条里地割が明瞭に残る地域であり、現代の区画や字名・古図などから古代の条里制を復元すべく研究されてきた。近年では、「難波大道」と周辺の古道との関係や、検出された水田など、考古学的な調査成果に基づく条里制の研究も進められている。

周囲に目を転ずると、大阪市津守庵寺・瓜破廃寺などの古代寺院が見られる。また、前述のように、天美西遺跡の北には式内社である阿麻弥許曾神社があり、その創建は平安時代初頭と伝えられている。06-1調査では、参道の側溝となる可能性を有する溝が検出されている。松原市河合遺跡では、人工的に造られたと考えられる大規模な溝が検出され、多量の土器・木製品に加え、人面墨画土器や人形などの祭祀遺物が出土している。松原市池内遺跡では、平安時代の掘立柱建物が60棟以上確認されている。以上のように、この時期になると、前代と比較して遺跡数は減少するものの、国家もしくはそれに類する氏族・組織による開発が行われていたことが窺える。

中世 大和川今池遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田・瓦溜などが検出されている。天美西遺跡では、平安時代末の柱穴群や土坑・溝などが検出されており、集落の一端が明らかとなっている。

一方、周辺では、平安時代末以降盛んとなる新田開発に伴い、段丘上における削平が著しく、遺跡が点在するに留まる。大阪市長原遺跡では、平安時代末から鎌倉時代初期に属する、堀により区画された集落が確認されている。また、同市苅田4丁目所在遺跡では、铸造工房関連遺構や井戸・土坑が密集した状態で検出されており、15世紀から16世紀初頭の遺物が多く出土している。松原市大堀遺跡では、鎌倉時代および室町時代の溝・井戸・畔などが確認されている。このほか、この時期の遺跡として、堺市新金岡遺跡・北三国ヶ丘遺跡・南花田遺跡、松原市高木遺跡などがある。

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

今回の大和川今池遺跡および天美西遺跡の調査は、当センターが平成22（2010）年9月に定めた『遺跡調査マニュアル』（以下、マニュアルと略記）に則り実施した。

調査は、おまかに、調査区の設定、仮設工、機械掘削、同出来形測量、人力掘削、同出来形測量の順で実施した。人力掘削では、適時、遺構面の測量や調査区・遺構断面等の実測、遺構面や遺構等の写真撮影を行い、最終遺構面では大阪府教育委員会の立会を受けた。なお、遺構面の測量ならびに調査区断面図は縮尺20分の1、遺構断面図は同10分の1により作成した。写真媒体は、記録用として35mm黑白・リバーサルフィルムを基本とし、報告書への掲載を想定したものについては 6×7 黒白フィルムも使用した。また、後述する写真台帳に使用するため、デジタルカメラによる撮影もあわせて実施した。撮影にあたっては、後述する整理作業を想定し、センター所定の写しこみラベルに調査名・調査区・撮影内容（地区割）・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、35mm黑白カメラで写しこみを行った。出土遺物に対しては、遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号などを記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付し、遺構・包含層ごとに適宜取り上げた。なお、今回は調査対象が2遺跡に渡るため、遺跡ごとに登録番号を付した。

遺構面などの測量や遺物の取り上げの基本となる地区割は、世界測地系に基づく国土座標（第VI座標系）を基準とし、大阪府全域を共通の方式で区画できるように、大小4段階の区画を設定している（図4）。第I区画は、大阪府南西端 $X = -192,000\text{m}$ 、 $Y = -88,000\text{m}$ を基準とし、縦6km、横8kmで区画し、縦軸をA～O、横軸を0～8で表示する。第II区画は、第I区画を縦1.5km、横2.0kmでそれぞれ4区分し、計16区画を設定している。そして、南西端を1、南東端を4とし、北東端を16とする、平行式の地区名表示を探る。第III区画は、第II区画を100m単位で縦15、横20に区画したもので、北東端を基点に縦軸がA～O、横軸が1～20となる。第IV区画は、第III区画を10m単位で縦、横各10に区画したもので、縦軸がa～j、横軸が1～10となる。以上の区分によると、今回の調査区はF5-15-120-1・2hとなる。なお、遺物の取り上げにおいては、第IV区画を基準とした。

第2節 整理作業の方法

出土遺物は、調査現場において洗浄し、乾燥後、注記を行った。注記は、マニュアルに従い、調査名（カタカナ・遺跡名が8文字を超える場合には、前8文字までの略記も可）・調査区名-登録番号の順で記載した。すなわち、大和川今池遺跡では「ヤマトガワイマイ11-1-登録番号」、天美西遺跡では「アマミニシ11-1-登録番号」となる。洗浄および注記が終了した遺物は、実測対象を抽出し、それ以外については登録番号ごとにビニール袋に詰め、コンテナへ収納した。今回、実測対象となった遺物は、大和川今池遺跡出土が4点、天美西遺跡出土が1点の、計5点である。実測対象遺物は、一部について接合作業を行い、センター所定の方眼紙に原寸で実測し、後述する遺物台帳用にデジタルカメラで撮影を行った。実測後、アドビ社のIllustrator CS2を用いて、実測図面のトレースを行い、報告書

掲載図版用の版下を作成した。また、これと併行して、実測対象遺物の写真撮影を行った。撮影は、6×7枚黑白フィルムを媒体として、写真室にて行った。現像されたフィルムは、フジフィルム社製フラットベッド型スキャナー（Lanovia Quattro）を用いてデジタルデータ化し、アドビ社のPhotoshop CS2にて色調等の補正を行った後、アドビ社のInDesign CS 2を用いて写真図版の編集を行った。

なお、出土遺物については登録台帳を、実測遺物については遺物台帳を、それぞれ作成した。台帳作成には、ファイルメーカー社のFile Maker Pro 8を用いた。台帳には、デジタルカメラで撮影した写真データに加え、登録台帳では、遺物に添付したラベルの情報および遺物の内容、収納したコンテナの情報などを、遺物台帳では、遺物の種別・器形・時期・残存率などの情報を入力した。

調査現場において作成した図面については、Illustrator CS 2を用いてトレースを行い、あわせて報告書掲載用の構造図版を作成した。作業終了後、各図面の内容を記載した一覧表を添付し、ファイルに収納した。

調査現場で撮影したフィルムは、現像の後、所定のアルバム類に収納した。写真の整理に当たっては、上記の登録・遺物台帳と同様に、写真台帳を作成した。写真台帳では、デジタルカメラで撮影した画像に加え、撮影の際に記入した写しこみラベルの情報、前述した各フィルムの収納情報を記入した。

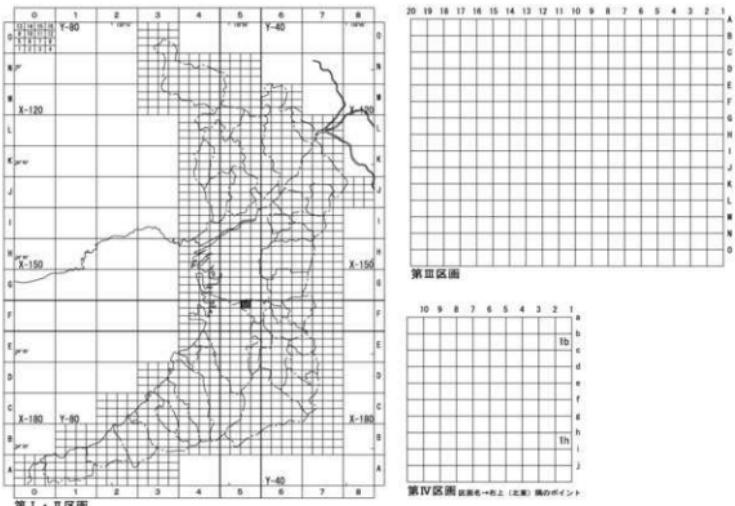


図4 地区割と調査地の位置

第4章 調査の成果

第1節 既往の調査成果

今回の調査地は、06-1調査における第1調査区と第2調査区の間にあたる（図5）。06-1調査では、計3面の遺構面が確認されており、弥生時代後期～古墳時代、古墳時代中・後期、古代、中世の4時期に区分されている。検出された遺構は古墳や建物跡・水田・井戸・溝・ピット等多種多様であり、あわせて多量の遺物が出土している。調査成果については『大和川今池遺跡II』として報告されている（市村・森屋編2009）。

上記の調査において特筆すべき遺構として、第1調査区西端部および第2調査区東端部において検出された溝がある。これらの溝は、調査区北方にある阿麻弥許曾神社に至る参道（下高野街道）の側溝となる可能性を有するものであり、いずれも調査区外へのびていた。このため、今回の調査区において、同遺構の延長部を確認するとともに、その性格を検証しうる可能性が想定されたため、特に留意して調査を行うこととした。

第2節 層序

本調査区の現況の標高はT.P.13.6m前後であり、ほぼ平坦な地形を呈している。前述の仮設工に伴い、機械にて掘削を開始したところ、調査区の大部分において、現代の開発に伴う擾乱を受けており、包含層の残存状況は決して良好ではないことが判明した。擾乱の深度は、その範囲のはぼ全域において地山層にまで達しており、層序を観察しうる包含層が残存していたのは、調査区北東部のみであった。当該箇所では、後述する地山層の上層に、暗灰色を呈する粘土～シルト層を確認することができた。同様の包含層は、隣接する06-1調査においても広範囲で確認されており、「黒色土層」として鍵層に



図5 既往の調査との位置関係



図6 調査区地層断面

位置づけられている。本調査においても、この「黒色土層」を鍵層として、層序の把握および検証を行った。以下、各層について、上層より順次述べる(図6)。

盛土層 調査区全域で確認できた、盛土および擾乱土を一括した。層厚は1.3~2.1mを測る。機械掘削により除去した。本層を除去した段階で、後述する第1層および地山層が露出したことから、本層より下層を人力掘削の対象とした。

中世~近世層(第1層) 調査区北東部および調査区北西部において確認された。調査区北東部では、「黒色土層」の直上にあたり、層厚は約0.2mを測る。本層は、10YR 4 / 3にぶい黄褐を呈するシルト~細砂と、10YR 5 / 2灰黄褐を呈する細砂混シルトの2層に細分が可能であり、上層を第1~1層、下層を第1~2層とした。機械掘削終了後、第1~1層上面を精査したが、後世の開発による削平が著しく、遺構は確認できなかったため、残存範囲や標高など、現況を記録した後、ただちに掘り下げた。その後、第1~2層上面を精査したところ、遺構を確認したため、これを第1面と設定した。本層からの出土遺物は少なく、いずれも細片であるが、弥生土器や土師器・須恵器などがみられる。

一方、調査区北西部では、擾乱土除去後、部分的に5Y 4 / 2灰オリーブを呈する細砂混シルトからなる薄層を確認した。当該箇所では「黒色土層」は確認できず、2層の可能性も想定したが、掘削中に近世の焼締陶器が出土したことから、第1層と判断した。以上の出土遺物および既往の調査成果から、本層は中世から近世に比定される。

弥生~古代層(第2層) 調査区北東部において、第1~2層の下層に確認できた、5Y 5 / 1灰色を呈する細砂混粘土~シルトを主体とし、下半に細礫を含む層である。06-1調査において、「黒色土層」と位置付けられた層にあたる。本層上面を第2面とした。残存部における層厚は0.05~0.1m程度であり、下層である地山層における起伏の影響を受け、西に向かうに従い、薄くなる傾向が看取された。出土遺物から、本層は弥生時代から古代に比定される。

地山層 2.5Y 6 / 4にぶい黄を呈する粗砂~細礫を主体とし、部分的に粘土~シルトの薄層を挟む層である。調査区の全域において確認しており、調査区北東部では第2層直下に、また、調査区西部において第1層が残存していた箇所では第1層直下に、それ以外の場所では擾乱土を除去することにより露出した。本層において、第2層の下面遺構と考えられる遺構を確認したため、これを第3面とした。擾乱の影響を受けていたため確実ではないが、残存部の標高を観察する限りでは、調査区中央付近が高く、東西に向けて低くなる地形を呈する。本層からは遺物の出土は認められず、擾乱坑を利用した下層観察においても、同様の堆積が確認されたことから、同層を地山層と判断し、最終調査面と捉えた。

第3節 遺構と遺物

本調査では、1トレンチ北東部において、3面の遺構面を確認した。しかしながら、それ以外の地点では、前述のように搅乱が著しく、その深度は地山層に達していた。そのため、2トレンチでは地山層上面において、複数時期の遺構を同一面において確認することとなり、それらを層位的に分類することは不可能であった。なおかつ、これらの遺構からは、時期を特定しうるような遺物は出土しなかったため、各遺構の切り合い関係や埋土、主軸の方向などから、本来帰属する遺構面を判断した。

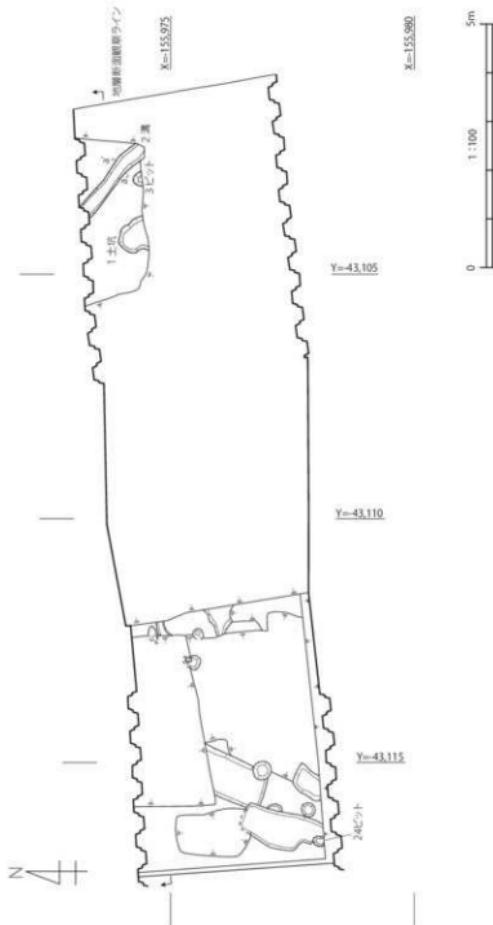


図7 第1面平面

1. 第1面(図7・8、図版1)

調査区北東部において確認した。標高はT.P.8.8mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。なお、調査区西端部では、部分的に第1層の残存を確認したが、大部分では地山層および遺構埋土が露出しており、遺構検出において誤認する恐れがあったため、人力掘削にて除去後、遺構検出を行った。本遺構面では、溝・土坑・ピットを検出している。

1 土坑 調査区北東部、 $X = -155.974$ m、 $Y = -43.104$ m付近で検出した。南側は攪乱を受けしており、全体形は不明であるが、残存部から推測すると、北北西—南南東に長軸を持つ、不整円形を呈するものと思われる。深さは0.1mを測る。当遺構からは、下層からの混入と思われる須恵器の小片が出土しているが、図化しえなかった。

2 溝 調査区北東端部において検出した。北は銅矢板にあたり、南は攪乱に切られている。北西—南東方向の溝で、幅0.3m、検出面からの深さは0.04mを測る。流水痕跡は認められなかった。

3 ピット $X = -155.974$ m、 $Y = -43.104$ m付近で検出された。南は攪乱に切られる。埋土は2層に細分され、上層では第1—1層を主体とした埋土が、下層では第1層および第2層・地山層が混合した埋土が認められた。本遺構は、本来第1面において検出すべき遺構であつたが、精査時に見落とし、第1—2層掘削時に確認することとなつた。このため、第1面の写真には表現されていない。検出時の深さは0.1mを測るが、周囲の標高をもとに復元すると、0.2mほどになるものと思われる。遺物は出土していない。

24 ピット 調査区南西部において検出した。南端は側溝にあたり失われている。後述する第1面の下面遺構と考えられる28土坑を切り、第1層と地山層がブロック状に混在する埋土を有することから、本遺構面に帰属する可能性が高いと判断した。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

2. 第2面(図9・10、図版1)

調査区北東部において確認した、第2層上面を第2面として調査を行つた。標高はT.P.8.7~8.8mを測る。本遺構面では、土坑およびピットを検出している。

一方、調査区西部では、前述のとおり、第2層は残存しておらず、時期を特定しうる遺物も出土していないことから、遺構の切り合い関係や埋土、主軸の方向等から当遺構面に帰属する遺構を抽出した。

4 土坑 調査区北東部、 $X = -155.974$ m、 $Y = -43.103$ m付近において検出した、北西—南東に長軸を持つ、楕円形の土坑である。長軸長0.48m、短軸長0.36m、検出面からの深さは0.06mを測る。遺物は出土しなかつた。

28 土坑 調査区南西端部、 $Y = -43.116.5$ m付近で検出した、北東—南西に長軸を持つ土坑である。南西は24ピットに切られ、南東部は調査区外へのびる。検出した範囲では、長軸長1.75m、短軸長0.6m、検出面からの深さは0.2mを測る。遺構西辺の一部が鉤の手状に屈曲するため、複数の遺構が重複している可能性も考えられたが、断面図観察の結果、切り合い関係は認められなかつたため、単一の遺構と判断した。埋土は2層に細分される。このうち、上層の埋土は第1層に酷似する細砂混シルト



図8 第1面検出遺構平・断面

であることから、本遺構は第1層の下面遺構と判断した。

27土坑 28土坑の北東部において、北は擾乱に、南側は21ピットおよび28土坑に切られる形で検出した、北東—南西に長軸を持つ土坑である。埋土は、地山層の二次堆積土を主体とし、わずかに第2層由来と思しき灰色の粘土ブロックが含まれる。

29土坑 調査区南西部、28土坑の東において検出した。南は調査区外にのび、全形は不明であるが、北東—南西に長軸を持つ土坑と思われる。長軸長は0.62m以上、短軸長は0.39m、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土は地山層の二次堆積土を主体とし、粘土～シルトのブロックが混じる。

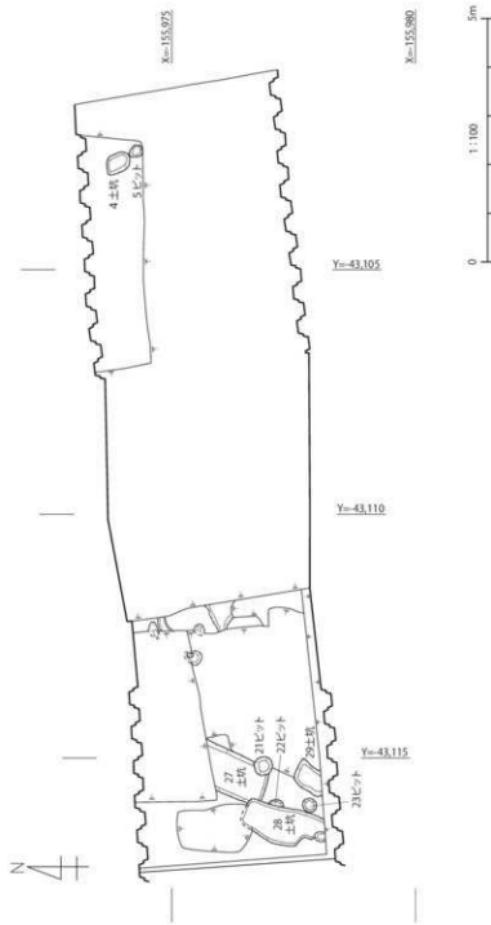


図9 第2面平面

27・29土坑は、いずれも時期を特定しうる遺物の出土ではなく、かつ、埋土に第1層を含まないため、第3面に帰属する可能性が残る。しかしながら、埋土が後述する第3面の遺構と異なる点、両土坑の長軸方向と同方位、もしくは直交する方位に主軸を有する古代の掘建柱建物跡が、隣接する06-1調査第1・2調査区において確認されている点などを考慮し、本遺構面に帰属する蓋然性が高いと判断した。

このほか、本遺構面では4基のピットを検出している。このうち、21・23ピットは、埋土が2層に細分され、その上層は第1層と酷似することから、第1層の下面遺構になるものと判断した。また、22ピットは、埋土が上述の22土坑と酷似することから、本遺構面に帰属するものと判断した。

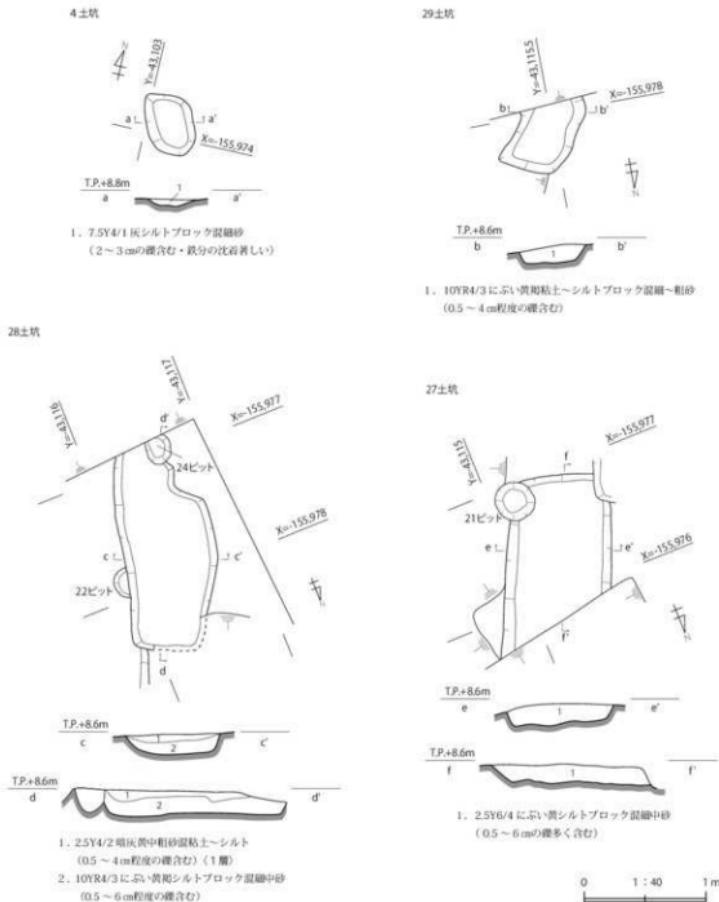


図10 第2面検出遺構平・断面

3. 第3面(図11・12、図版2)

地山層上面を第3面とした。搅乱の影響が軽微な地点の標高はT.P.8.6~8.8mを測り、Y=-43.107mおよびY=-43.112m付近が高く、東西に低くなる微地形を呈する。第3面では、第2層の下面遺構となる溝・土坑・ピットを検出した。

6溝 調査区北東端部、Y=-43.103m付近において検出した、南北方向にのびる溝である。北は鋼矢板にあたり、南は搅乱に切られるため、残存状態は良くない。検出した範囲では、幅は0.5m、検出面からの深さは0.27mを測る。埋土は、2層に細分されるが、いずれもブロック土を含み、人為的に

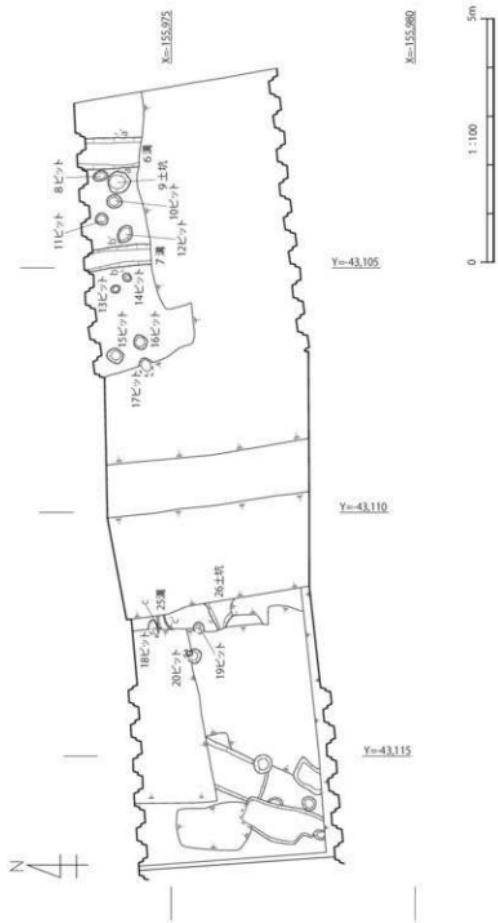


図11 第3面平面

6溝

7溝

25溝



9土坑

26土坑

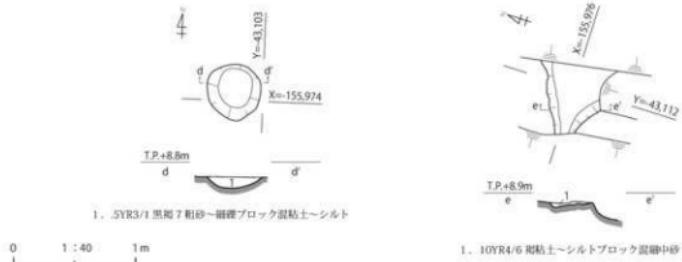


図12 第3面検出遺構平・断面

埋め戻された可能性が高い。遺物は出土していない。

なお、本遺構の北側には、06-1調査第1調査区において検出された「2444溝」が存在する（図14参照）。「2444溝」は、検出幅約3mを測り、溝内に複数の畦畔状の高まりや、一段深くなる溝状のくぼみを有する。この溝状のくぼみが、今回検出した6溝の延長線上にあたり、ほぼ同幅であることから、連続する同一遺構となる可能性がある。報告書に断面図や埋土が記載されていないため確実ではないが、6溝と同一遺構であるなら、帰属時期に齟齬をきたすこととなるため、さらなる検証が必要となる。

7溝 調査区北東端部、 $Y = -43.105\text{ m}$ で検出した、南北方向にのびる溝である。6溝同様、北は銅矢板にあたり、南は搅乱に切られているため、残存状態は良くない。幅は0.4m、検出面からの深さは0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

25溝 $X = -155.975\text{ m}$ 、 $Y = -43.112.5\text{ m}$ 付近で検出した。東西方向を向き、わずかに弧を描くが、両端を搅乱に切られ、極めて狭小な範囲における検出であるため、本来の形状は不明である。幅は0.16m、検出面からの深さは0.04mを測る。遺物は出土しなかった。

9土坑 $X = -155.974\text{ m}$ 、 $Y = -43.103\text{ m}$ 付近で検出した。長軸0.45m、短軸0.43m、検出面からの深さは0.08mを測る、不整円形の土坑である。埋土は、地山層由来と思われる細砂～粗砂のブロックを含む、黒褐色を呈する粘土～シルトである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

26土坑 $X = -155.974\text{ m}$ 、 $Y = -43.104\text{ m}$ で検出した。25溝と同様、東西を搅乱に切られており、狭小な範囲での検出となった。検出範囲においては、西が狭く、東が広いという不整形を呈しており、全体形は不明である。調査時は、複数条の溝が交差もしくは重複している可能性を想定し、調査を行ったが、それを証明する痕跡は検出できず、不整形を呈した土坑と判断した。遺物は出土しなかった。

このほか、第3面では12基のビット（8・10～20ビット）を確認しているが、建物などに復元できるものはなかった。埋土は、18ビットのみ2層に細分されたが、それ以外はすべて単層である。いずれも地山層と第2層由来の土がブロック状に混在するものであるが、埋土に占める地山と第2層の比

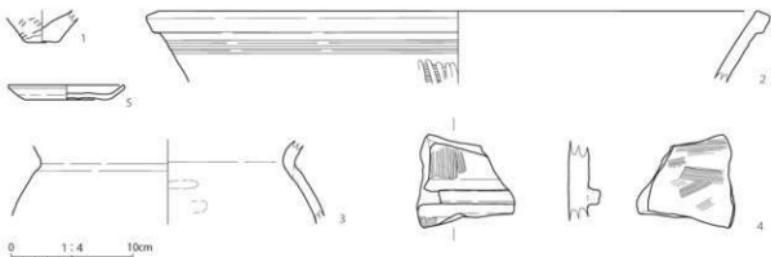


図13 包含層・搅乱土出土遺物

率は、遺構により異なり、8・13・14・16・17 ピット、10～12 ピット、18・20 ピットにおいて、それぞれ共通した埋土が確認できた。あるいは建造物の単位や時期差を表す可能性も考えられるが、いずれのピットからも遺物は出土しておらず、検証はできなかった。

4. 出土遺物（図13、図版3）

既述のように、本調査区では遺物の出土は総じて少なく、その多くは図化しえない小片であった。しかしながら、包含層および、盛土・搅乱土層を掘削中に、図化が可能な遺物がわずかながら出土している。なお、(1)～(4)は大和川今池遺跡から、(5)は天美西遺跡からの出土となる。

(1)は第1層掘削中に出土した、甕の底部片である。全体に対する残存率は5%以下で、底部の復元径は2.6cmを測る。表面は摩滅しているが、かろうじてタタキ目が残存する。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の所産であり、下層からの混入と思われる。

(2)は第2層掘削中に、X = -155,974.4 m、Y = -43,103 m付近から出土した、須恵器甕の口縁部片である。復元口径は49cmを測るが、残存率は5%以下と低く、多少の誤差が生じている可能性がある。口縁端部を肥厚させ、直下には2条の浅い沈線が巡る。沈線の下方にはカキメの後、縦方向のヘラ描沈線文を施している。TK217型式で、7世紀後半の所産と考えられる。

(3)～(5)は搅乱土を掘削中に出土した。いずれも本来の位置を保ってはいないが、出土遺物が少量である本調査においては、遺跡の存続時期などを考察するうえでの参考になると判断し、掲載した。

(3)は土師器甕である。頸部の復元径は20.8cmを測る。外面は摩滅しており、調整痕などは認められない。内面にはわずかではあるが、指オサエ痕が残る。頸部は、強い横ナデにより段を形成している。9世紀頃の所産と思われるが、やや厚めで、硬質な焼成であるため、さらに時代が下る可能性も残る。(4)はX = -155,976.6 m、Y = -43,113.0 m付近より出土した円筒埴輪片である。断面M字形の突帯を付し、外面にタテハケ、内面にナデの後、部分的にヨコハケを施す。06-1調査では、隣接する第2調査区西端部において、古墳時代中期の方墳を確認しており、周溝内より円筒埴輪や家形埴輪が出土している。突帯の形態や調整などから、本資料も同時期のものと思われる。

(5)は、地下埋設管の保護工を実施中に、X = -155,976.0 m、Y = -43,113.8 m付近において、埋設管の埋戻土中より出土した土師器小皿である。残存率は60%程度であり、復元口径9.5cm、器高1.2cmを測る。10世紀末～12世紀頃か。本資料は、本調査において天美西遺跡の範囲内より出土した唯一の遺物である。

第5章 総括

本調査区では、弥生時代後期から古墳時代・古代・中世に大別される遺構を確認することができた。本章では、隣接する06-1調査における調査成果と対照しながら、時代ごとに遺構の変遷を追い、本調査のまとめとしたい。

1. 弥生時代後期～古墳時代（図14）

今回の調査区において、最も多くの遺構を検出した時期にあたる。遺構は、擾乱の影響が少ないY= -43,102 m ~ Y= -43,107 m および Y= -43,112 m付近において集中して確認された。分布や残存状況から推察すると、本来は擾乱部分にも遺構が拡がっていた可能性が高いと思われる。

同時期の遺構は、本調査区の西に接する06-1調査第2調査区（以下、第2調査区と略記）において多数確認されている。これに対し、本調査区の東に位置する06-1調査第1調査区（以下、第1調査区と略記）では空隙地が目立ち、遺構の分布は希薄となる。

こうした状況は、当地における地形の制約によるものと思われる。既往の調査成果によると、T.P.9.0 m 前後を測る第2調査区に対し、第1調査区東端部では T.P.8.3 m ほどであり、徐々に標高が低くなる地形を呈することが明らかとなっている。今回の調査区でも同様に、東に向けて低くなる地形であることは、前章において述べたところである。

こうしたことから、今回の調査区は居住域の東端部に位置し、これより東側では土地の利用形態が変化するものと考えられる。この場合、今回検出した6溝は、居住域の東端に開鑿されたこととなる。前章で述べたように、溝の帰属時期についてはさらなる検討が必要であるが、時期を同じくするという仮定が許されるのであれば、居住域の東限を画する機能を有していた可能性も考えられる。

2. 古代（図15）

本調査において古代に帰属すると推測される遺構は、調査区の東西端において土坑およびピットが散見されるに留まる。

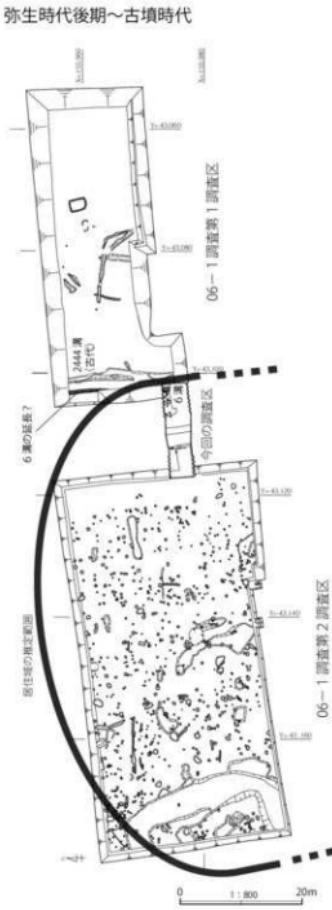
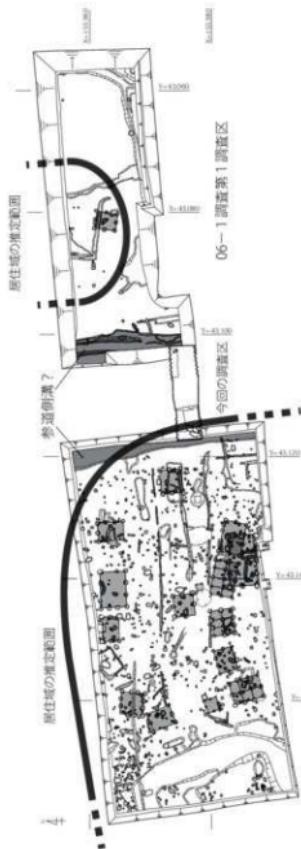


図14 遺構変遷図（1）

隣接する調査区に目を転ずると、第2調査区において建物跡やピットが遺構が検出されていることから、前代と同様に、居住域として利用されていたことが窺える。今回の調査区、Y = -43.107 m付近で検出した土坑やピットも、具体的な性格は不明ながらも、居住域の一端に含まれるものと考えられる。

なお、前述のように、当該期において特筆すべき遺構として、06-1調査において検出された阿麻弥許曾神社参道（下高野街道）の側溝となる可能性を持つ溝がある。本調査区において、同遺構の未検出部を確認するとともに、その性格を検証しうる可能性が想定されたが、本調査区では上述の溝に対応する遺構は確認できなかった。また、道路遺構本体も、搅乱部に存在していた可能性は残るが、今回の

古代



中世

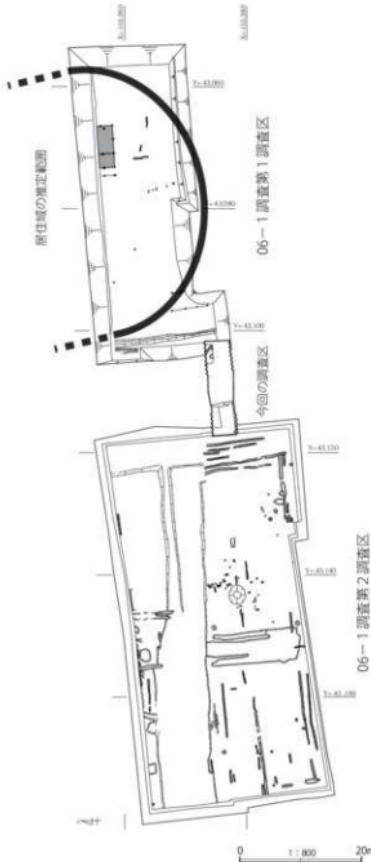


図15 遺構変遷図（2）

調査では明らかにすることはできなかった。さらに、今回検出した土坑やピットと、上述の溝との関係なども不明であり、さらなる検証が必要である。

3. 中世（図15）

本調査区では、溝・土坑・ピット等、わずかな遺構を確認したのみである。出土遺物も、この時期のものは特に少なく、具体的な様相は明らかにしない。

周囲では、第1調査区において、掘立柱建物や柵跡などが検出されている。しかし、本調査区からは若干の距離を有しており、かつ、居住域の中心は第1調査区北方に展開しているものと思われることから、本調査区が居住域の一端に含まれるとは考えにくい。むしろ、遺構密度および遺物量から勘案すると、第2調査区に広がる生産域に近い土地利用であったと思われる。ただし、撫亂によって失われた地点に、前代から継続して、道路が布設されていた可能性は残る。

以上、本調査区における調査結果に基づき、当地における土地利用の変遷について述べてきた。限られた調査区域における成果であり、かつ、前章でも記しているとおり、本調査区では遺構面の残存状況は決して良いとは言えないため、多くは既往の調査成果を援用した推論となってしまった。様々な問題を内包する結果であることは承知しているが、空白地を埋めることにより、新たな知見を得ることができ、集落の様相を探すことができたと考える。問題点については、今後、周辺地點における調査の進展と成果の蓄積を待ち、検討を重ねていきたい。

参考文献

- 市村慎太郎・森屋美佐子編 2009『大和川今池遺跡Ⅱ』財團法人大阪府文化財センター
井上正雄 1921『大阪府全誌』卷之四 清文堂（1976年復刻版）
小田木富慈美 2007「にぎわう平安のムラ～天美西遺跡の調査成果から～」『草火』128号 財團法人大阪市文化財協会
小野久隆編 2011『大和川今池遺跡Ⅳ』財團法人大阪府文化財センター
川西宏幸 1988『円筒埴輪総論』『古墳時代政治史序説』堀書房
日下雅義 1980『大和川・今池遺跡付近の地理的環境』『大和川・今池遺跡Ⅱ』大和川・今池遺跡調査会
佐藤 隆 2000『第2節 古代難波地域の土器様相とその史的背景』『難波宮址の研究』卷11 財團法人大阪市文化財協会
佐藤 隆 2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年—陶邑空器編年への再構築に向けて—」『大阪歴史博物館研究紀要』 第2巻 財團法人大阪市文化財協会
三宮昌弘編 2009『大和川今池遺跡Ⅰ～難波大道の調査～』財團法人大阪府文化財センター
出水時巳 1980『松原市域における条里』『大和川・今池遺跡Ⅱ』大和川・今池遺跡調査会
松原市史編さん委員会編 1985『松原市史』第1巻本文編 1 松原市役所
森村健一 1979『大和川・今池遺跡第一地区発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会
森村健一編 1980『大和川・今池遺跡Ⅱ第一・四・五地区発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会
森村健一編 1981『大和川・今池遺跡Ⅲ第一地区・「古道」発掘調査報告書』大和川・今池遺跡調査会
森屋美佐子 2010『大和川今池遺跡Ⅲ』財團法人大阪府文化財センター
吉田壽三編 1997『大阪府精密住宅地図 松原市』吉田地図株式会社

写 真 図 版

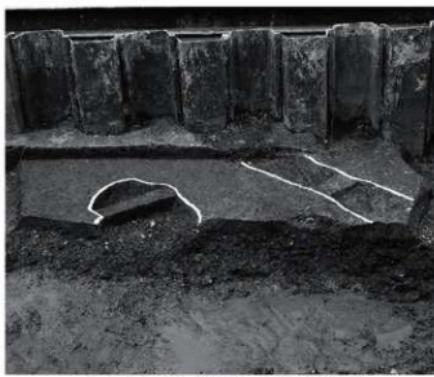
図版1 遺構(1)



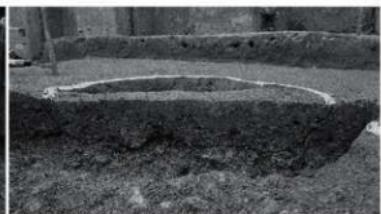
1. 1トレンチ 基本層序（南西から）



2. 1トレンチ 基本層序（南から）



3. 1トレンチ 第1面 全景（南から）



4. 第1面 1土坑 断面（南東から）



5. 第1面 2溝 断面（南東から）



6. 1トレンチ 第2面 全景（東から）

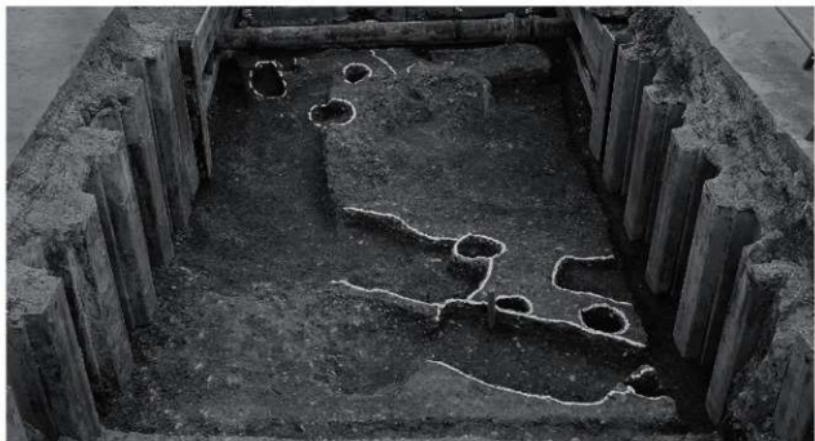


7. 第2面 4土坑 断面（南東から）



8. 第2面 5ピット 断面（南東から）

図版2 遺構（2）



1, 2 トレンチ 全景（西から）



2. 1 トレンチ 第3面 全景（南から）



3. 第3面 6溝 断面（南から）



4. 第3面 19ビット 断面（西から）

図版3 遺物



1

1. 大和川今池遺跡 1層出土 土器



2

2. 大和川今池遺跡 2層出土 土器



3

3. 大和川今池遺跡 摂乱土出土 土器



4

4. 大和川今池遺跡 摂乱土出土 墓輪



5

5. 天美西遺跡 摂乱土出土 土器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまとがわいまいけいせき・あまみにしいせき						
書名	大和川今池遺跡・天美西遺跡						
副書名	都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第221集						
編著者名	永野 仁						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2011年 11月 30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	緯度・経度	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
やまとがわいまいけい 大和川今池 遺跡	おおさかふまつばらし 大阪府松原市 あまみにし 天美西	27217	12	北緯 34 度 35 分 34 秒 東經 135 度 31 分 47 秒	20110608 ~ 20110831	648 m ²	都市計画道路大和 川線および都市計 画道路堺松原線建 設に伴う送水管の 布設工事
あまみにし 天美西 遺跡	おおさかふおおかかし 大阪府大阪市 ひがしうみよしくやた 東住吉区矢田	27121	56	北緯 34 度 35 分 34 秒 東經 135 度 31 分 47 秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大和川今池 遺跡	弥生	集落	土坑・溝・ピット	土器			
	古墳			土師器・須恵器・埴輪			
	古代		土坑・ピット	土師器・須恵器・黒色土器			
	中世		土坑・溝・ピット	土師器			
天美西遺跡	集落	古代	なし	土師器皿			
要 約	弥生時代後期～中世における遺構の検出を行った。その時期は、弥生時代後期～古墳時代・古 代・中世の大きく3時期にある。弥生時代後期～古墳時代では、複数のピットを検出し、集落 の拡がりを確認した。古代・中世では、複数基の土坑を検出し、当地における土地開発の一端 を窺うことができた。						

公益財團法人 大阪府文化財センター発掘調査報告書 第221集

大和川今池遺跡・天美西遺跡

—都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日／2011年11月30日発行

編集・発行／公益財團法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 明 新 社

奈良市南京終町3丁目464番地